

いま、地域の歴史の再発見や見つめ直しの取組が盛り上がりを見せています。

近年は、世代交代や人口減少によって、古文書や民具など、地域にあった資料が無くなってきています。これと同時に、地域の昔の出来事や伝承に詳しい、いわゆる“古老”と呼ばれる方々も少なくなり、地域の記憶の伝承も困難になりつつある状況です。市内では、この状況に危機感を覚え、地域の歴史を次世代へつなげるため、「地域史」の編さんや、資料の掘り起こしに取り組む活動がいくつかの地域で始められています。

今回紹介する「磯郷土史クラブ」は、地域の記憶の希薄化を防ぎ、磯地区の歴史を掘り起こし、次世代へとつなげる活動を進めるため、昨年の夏に結成されました。現在、クラブが進めている取組が、「カナダ移民」に関する調査です。この磯地区は、市内でも希少な「カナダ移民」が積極的に行われた地域です。『米原町史 通史編』を見ますと、明治26年（1893年）頃に、磯から三人がカナダへ渡航したことが最初の事例です。その後、明治29年（1896年）に発生した琵琶湖の大水害を契機として、磯のほか、湖東の湖岸地区の村々から多くの人々がカナダへ向かいます。大正9年（1920年）には、カナダには253人の磯出身者が在住していました。その後、太平洋戦争が起きると、日本人はカナダ政府から「敵国人」として扱われ、収容所への強制入所や、帰国などを余儀なくされました。

さて、クラブでは、「なぜ磯では、他所と違って、カナダ移民が進められたのか」、を解き明かすため、自治会内で資料アンケート調査や、現地調査をされるなど、積極的な活動をされています。

今回の資料調査では、実際に磯からカナダのバンクーバーに移住された方が書かれた日記やメモ帳、現地で撮影された写真などが見つかりました。これらの資料は、カナダで過ごした日々の生活の実態を私たちに教えてくれる貴重な資料です。今後、クラブでは、資料内容の調査や、聴き取りなどを進め、発表する機会を設けられるとのことです。

今回の記事については、磯郷土史クラブの皆さんに御協力いただきました。ありがとうございました。



磯郷土史クラブの活動風景

情報BOX

◆米原市教育委員会では下記の報告書の刊行を予定しています。

『柏原宿萬留帳調査報告書』8・9巻（完結）
『近江坂田郡柏原村「天正検地帳」「慶長検地帳」「延宝検地帳」』（米原市文獻調査報告書1）

◆米原市教育委員会では下記の文化財活用パンフVol.3を作成しました。

「後鳥羽上皇ゆかりの地「まいばら」」

◎問合せは、米原市生涯学習課まで。

◆伊吹山文化資料館では下記冊子を刊行しました。
『伊吹山文化資料館年報24 令和3年度の活動』

◆京都市立芸術大学畑中研究室が伊吹山文化資料館での成果を下記の報告書にまとめられました。
『Neo 汽車土瓶2 信楽汽車土瓶プロジェクト』

◆米原市立伊吹山中学校では伊吹山文化資料館と協働で下記のパンフを作成されました。

「ふるさとの街道 北国脇往還マップ」

◎問合せは伊吹山文化資料館（☎0749-58-0252）まで。

◆◆編集後記◆◆

いきなりですが米原市文化財ニュース『佐加太』の最終号です■1995年3月以来、坂田郡4町（2005年～米原市）の埋蔵文化財を中心にしたネタを年2回発信してきました■折々に全国からお問い合わせがあり、バックナンバーを求める声をいただきました（バックナンバーは伊吹山文化資料館で取り揃えています）■刊行終了は本紙で先輩方がおっしゃる通り「発展的廃刊」なのです■坂田郡の旧町を名乗った職員もとうとう編集者ひとりになってしまいました■来年度からの米原市文化財は生え抜き専門職と新進気鋭の3人が行政職員の支援で進めます■「坂田」の名前がまたひとつ消えますが、新しい「米原」がまたひとつ増えます■変わらぬご指導をお願いいたします（扇の舞）

米原市文化財ニュース

佐加太 第52号（最終号）

発行 令和5年（2023）3月27日

編集 米原市教育委員会

〒521-8501 滋賀県米原市米原 1016

米原市生涯学習課（歴史文化財担当）

TEL0749（53）5154

FAX0749（53）5129



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

第52号

—御愛顧御礼！最終号—

2023年3月27日

滋賀県米原市教育委員会

米原町の文化財行政事始めの頃

滋賀県立大学名誉教授 中井 均

私が米原町に文化財技師として赴任したのは昭和58年12月という中途半端な時期でした。それは翌年度当初より磯に浄水場を建設する事前発掘調査の準備のためでした。滋賀県文化財保護協会が発掘調査を担当していた私は、予算執行などしたことがなかったもので、米原町では行政のイロハから学ぶ必要がありました。

昭和59年の年明け早々湖北は連日の降雪で、後に59豪雪と呼ばれる大雪となりました。大阪で生まれ育った私にとって、この先米原でやっていけるのだろうかと不安にさせられた大雪で、湖北の強烈な先制パンチを喰らわれました。

磯山城遺跡の発掘調査では縄文時代早期末葉の屈葬人骨が出土しました。たまたま取材に来たNHKがその日の夕方にテレビで放映したのです。当時私は高槻から米原まで電車で通っており、午後8時40分のニュースは電車の中で知る由もありませんでした。

新聞社の記者たちは担当者を出せと抗議したようですが、その担当者が枚方から通っていることを知り、今さら呼び出すわけにもいかなかったようです。ただ、当時の社会教育課の係長をはじめ職員の皆さんは夜の発掘現場まで行って新聞社への対応をいただきました。当時の新聞には懐中電灯で人骨を照らす係長が写っています。坂田郡内で最初の文化財技師であり、まったくのひとりで始まった文化財



磯山城遺跡 人骨取上げ作業風景

行政は、このようなトラブルから始まりました。このトラブルが縁となり、その後は新聞社の記者さんたちとは昵懇となり、文化財の記事を多く取り上げていただきました。

その後、近江町に宮崎幹也さん、山東町に桂田峰男さん、伊吹町に高橋順之さんが文化財専門職員となり、坂田郡4町に職員が配置されます。それは滋賀県内でもっとも充実した体制となりました。さらに当時抱えていた文化財行政の諸問題を郡内で対応すべく、坂田郡社会教育研究会のなかに文化財担当者部会を設置してもらいました。郡社教文化財部会と呼び、4町で予算を出し合って誕生したのが「佐加太」でした。

4町時代の最後の担当である高橋さんも今年定年を迎えられる。それに合わせたように「佐加太」も最終号を迎えることとなりました。

現在の米原市には市制施行後に採用された専門職員がいます。新たな世代の担当者たちがこれからの米原市の文化財行政を推進してくれることを大いに期待したいと思います。



磯山城遺跡 人骨出土状況

保存されている重要な遺跡

元 米原市役所 宮崎 幹也

開発に伴い事前に遺跡を発掘調査する行為は「記録保存」という言葉で呼ばれていますが、これとは異なり発掘を実施せずできるだけ昔の状態のまま残すことを「現状保存」と呼びます。文化庁はこれを遺跡保存の原則にしており、米原市内にもそのような事例をみることができます。

一般国道8号バイパスを長浜市側から真直ぐ南進して米原市に入るところで、道路は東側に大きく迂回します。1969年に滋賀県教育委員会が発行した『国道8号線長浜市・近江町バイパス遺跡分布調査報告書』には道路予定地の米原市長沢地先に「奥松戸遺跡」という寺院跡の存在が記されています。

現在も藪地となっている同遺跡を現状保存するため、道路計画路線を大きく東側に迂回させ現在の道路が建設されました。また、道路敷設箇所や隣接する農業用水の灌漑排水路敷設箇所では、発掘調査を実施して記録保存も行われています。

発掘調査で見えられた貴重な遺構を将来に残すために地下保存された保存事例があります。米原市内では法勝寺遺跡の前方後方形周溝墓・寺院跡中塚部（高溝）、塚の越古墳周濠部（新庄）、西円寺遺跡円形低墳丘墓第1号墓（西円寺）、北方田中遺跡掘立柱建物群（北方）などの遺跡は工事影響を受けないよう盛土調整され地下保存されています。

調査を実施せずに現状保存された遺跡、調査を実施した上で地下保存された遺構、これらは共に貴重な埋蔵文化財を将来にわたって保存するという重要な役割を果たしています。文化財保護を担当する仕事の中ではこれらの遺跡の状況を定期的に確認すると共に遺跡の重要性を啓発していく必要があります。



奥松戸遺跡の現状保存地

最終号にあたって

米原市役所 桂田 峰男

この度、米原市文化財ニュース『佐加太』が最終号を迎えるとのこと。突然のことでもあり驚きましたが、新たな1ページを拓くためのものであることから、少し安堵した心もちです。

さて今回、最終号での新鮮な文化財ニュースを。歴史文化財保護課（現、生涯学習課）を卒業以来、文化財にタッチしていない身には、厳しいものがありますが、卒業前より策定が進められています。「米原市文化財保存活用地域計画」に少しばかり触れて、その任を終えたいと思います。現在、米原市においても、少子高齢化、地域コミュニティの希薄化などが進み、地域で守り伝えられてきた文化財の保存や継承が難しくなりつつあります。

そのような状況の中で、「地域の宝」である文化財を守り継承するため、観光や地域の振興に活用し、米原らしい文化財の保存と活用のマスタープランとして、「米原市文化財保存活用地域計画」の策定が進められています。今回策定されています地域計画で、米原市の歴史文化を読み解くキーワードは、「水」と「巷」。まずは「水」。秀峰伊吹山や霊仙山などの山々から流れ出る豊富な水は、市内を潤しながら母なる湖・琵琶湖へとつながります。これら地域を潤す水は、豊富な湧水を生み出し、天野川では国の特別天然記念物の「長岡のゲンジボタル」、また、水源の山

には、天然記念物の「伊吹山頂草原植物群落」（いわゆるお花畑）など、独自の貴重で固有の自然を育んでいます。

次は、もう一つのキーワードは「巷」です。「巷」とは、人が集まる賑やかな場所、そこから道が分かれる場所。米原市には、古代の東山道、近世の中山道をはじめ、北国街道、北国脇往還などの陸の道が整備され、宿場が置かれました。また、朝妻湊や米原湊などの水の道の拠点も置かれました。そこには、人や物資が集まり、賑わいが生まれ、いくつもの「巷」が生まれました。これらが米原らしさを形づくっていきます。

この2つのキーワードの詳細は、今後策定される地域計画に委ねるとして、この地域計画が具体性を持ちながら、米原らしい文化財の保存と活用が図られることを祈念するものです。

最後になりましたが、長きにわたり編集担当されて「扇の舞」さん、本当にお疲れさまでした。また、長年にわたり米原市文化財ニュース『佐加太』をご愛顧いただいた方々、誠にありがとうございました。今後の『シン・佐加太』にも乞うご期待！



坂田郡文化財部会を振り返る

米原市生涯学習課 高橋 順之

昭和62年（1987）、坂田郡4町の情報交換をするために坂田郡社会教育研究会内に文化財研究会（平成元年から文化財部会）が組織されました。話題の中心は、4町で盛んにおこなわれていた発掘調査をより良いものにするための検討ですが、発掘成果や坂田郡の歴史や特徴を、町民や県民にいかにか知ってもらうかということも課題のひとつでした。当時、郡内には資料館施設はありません。そこで、平成3年滋賀県立文化産業交流会館（米原町）で「甦る坂田の古代」展を開催し、以後毎年各町の公民館で巡回展を行いました。その集大成として平成6年に県立安土城考古博物館で「古代文化の交差点 一文化は坂田郡を通った一」を開催しました。同年には第13回庄内式土器研究会「近江系土器の実態とその移動」で、県内外の研究者との交流を図りました。

このような活動を経て、部会誌「佐加太」が平成7年（1995）3月に創刊されたのです。また、平成10年から12年にかけて、伊吹山文化資料館（伊吹町）、柏原宿歴史館（山東町）、近江はにわ館（近江町）、醒井宿資料館（米原町）と、各町の特色に合わせた資料館施設が相次いで開館しました。

高溝遺跡第3次調査

高溝遺跡は、滋賀県米原市高溝に所在し、琵琶湖の北東部を南北に伸びる横山丘陵の南西裾部に位置しています。高溝遺跡は周辺に所在している、長門寺遺跡・正光寺遺跡・顔戸遺跡とともに「顔戸遺跡群」を形成しており、高溝遺跡はこの遺跡群の北端に位置しています。

県営ほ場整備に伴って実施された第1次調査（昭和61～63年度）では、縄文時代の遺物包含層のほか、古墳時代の大溝遺構、平安時代の掘立柱建物跡などが検出されています。縄文時代以降、弥生時代末から古墳時代中期にかけて大溝を伴う集落を形成し、その後平安時代後期までの条里開発によって埋められた可能性があることが調査から分かりました。

県営灌漑排水事業に伴って実施された第2次調査（平成2年度）では、パイプライン埋設と灌漑排水管理設により南北に長い調査区で設定され、北部では掘立柱建物跡、中央部で畦畔遺構、南部で大溝遺構が検出されています。

この2回の調査により、高溝遺跡の性格として、①縄文時代に連綿と続く集落があったこと、②弥生時代後期から古墳時代中期にかけて大溝を伴う集落があったこと、③寺院（法勝寺）の造営時期に南北方位を主軸とする建物を持つ集落があったこと、④平安時代前期以降に大溝が埋められた可能性があること、が明らかとなりました。

今年度、県道伊部近江線と県道東上坂近江線を南北でつなぐ市道顔戸・八田羽織線の新設工事に伴い、

さて、何といたっても坂田郡の文化財保護に参考になりそうな遺跡や施設で研修したのは思い出です。伊勢森添遺跡、信濃星糞峠、丹波篠山チルドレンズミュージアム、備前閑谷学校、若狭熊川宿、尾張の山茶碗、飛騨宮川村の石棒。その内容の濃さに他の市町の担当者が参加したこともあります。夜なかにミストを買いに走った甲斐石和、目覚めたら紀ノ川が氾濫していた根来寺、仏壇部屋の安宿に泊まった能登真脇遺跡、すき焼きを焦がした越前平泉寺、雪道は任せてと言ったのに脱輪するわ、こするわの大和十津川郷、そして中井さんが暴走した雪の安芸小倉山城。行程には必ず城跡を入れました。これらの見聞が、坂田郡そして米原市の文化財保護行政のいまにつながっていると思います。



（前列）宮崎・中井（後列）桂田・高橋

米原市生涯学習課 石田 雄士

令和4年（2022年）5月10日から6月13日にかけて第3次調査を実施しました。調査では古墳時代から古代にかけての沼跡を検出しました。沼跡は上下2層に分かれ、下層からは古墳時代前半の土師器が主に出土し、上層からは飛鳥時代の須恵器や平瓦の破片などが出土しました。年代は不明ですが、沼跡のほかにピット3基を検出しました。出土遺物は、沼跡から出土した古墳時代から古代にかけての土器が大半で、そのほかにはピットから土師器、須恵器の破片がわずかに出土しました。また、土器以外の遺物として、モモの種と思われる種子も沼跡から見つかりました。

今回の調査により、第1次調査で検出された古墳時代の大溝を伴う集落の北には、沼沢地が広がっていたことが明らかとなりました。



土師器出土状況（第3次調査）